



第31回 アクティブ・ラーニングとしての幼児教育

いい学校に行くために勉強しろと言われ続けた子どもが親殺しをするという痛ましい事件が起こった。事件としては凄惨だが考え方は普通である。「勉強」の目的についての考え方が今も残っていることが垣間見えた。なんで勉強するのか。いい高校に入るため。いい大学に入るため。大学に入ればいい会社に入れて安定した収入に幸せな人生が保証される。漠然とこんな風に考えている人が今でも多いのであろうか。「いい」とは何かなんて考えない。どの学校を「出たか」が関心の的であり、そこで何を学んだかは問われない。なので学問社会ではなく学歴社会なのである。大学が、そして大学に入るための受験が、「勉強」の終着駅になっているというのは否めない。

「これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに、育むことはできない。」園長が言いそうなお話だが、中央教育審議会が言っていることである。平成二十六年十二月の答申には「高大接続改革が目指す未来姿」が語られている。

大学教育の変革、ということとは大学受験を終着点とするような日本の教育体系全体の変革が、迫られてくることになる。どっちに向かって変革するのか。「アクティブ・ラーニングへと質的に転換する」。じゃ、アクティブ・ラーニングって？「学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」のことであり、「従来のような知識の伝達・注入」に対して「主体性・多様性・協働性」を育成する。

あれ？なんか聞いたことがあるな。はい。子どもの自発性・主体性を育むのが幼児教育の使命です。「多様な人々と協力する」前提となる聞く力、受け容れる力を育むのがびさいの教育理念です。

つまり幼児教育はそもそもアクティブ・ラーニングなのである。教育のはじめである幼児教育が、目指すべき到達地点に先回りしていた。そんな時代の教育を私どもは担っているのである。



ある学校の先生に聞いた、「教科書が終わらないと理科の実験の時間が削られてしまう」と。教科書に問題も正解も書いてある。実験の結果も書いてある。それを見れば正解がすぐわかるので効率もいい。それを学ぶのには要らない。教室で頭と指先だけ使つやり方で事足りる。まさにこれが、中教審のいわゆる「画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問う評価」を重視してアクティブ・ラーニングを切り捨ててきた学校ということの体質であらう。学力とは頭だけ使つて正解を導く技術であつて、迷ったり間違ったりしながら驚き納得する経験のことではないと言わんばかり。なので「実験が失敗した」という変な思想を子どもが抱くようになるのである。O&A世界を破るはずの実験という生きた体験を、O&A物差しで測つてしまつてしまう歪みである。長年しみついた無身体的学習と効率重視の先にあるのは道具としてのタブレットにインターネット。これで知の平面化、いや、人間の平面化は徹底される。

小学校が魚市場見学をしないから美哉はやつたのである、小学校がフナ解剖をしないから美哉はお魚をさばくのである。

遊びとは、手を使い足腰を使い人と関わる能動的な学びである。だからびさいは「遊びの学校」を掲げるのである。

あえてアクティブ・ラーニングの尻馬に乗って幼児教育を語る園長ですが、それに対して、私が信頼してやまない、ある大学の先生の「コメントを拝聴して筆をおきます。

「中教審のいうことなんてまったく信じてない私としては、国がこつこつ重要な教育問題を「制度化」しようとしていることにはアブナイアブナイ……と申すほかございません。」

(参照)

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について
～ すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために ～ 答 申

平成26年12月22日 中央教育審議会 (抜粋)

生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い¹。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない。¹ キャシー・デビッドソン氏(ニューヨーク市立大学大学院センター教授)の予測によれば、「2011年にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」とされている。

特に、18歳頃における一度限りの一斉受験という特殊な行事が、長い人生航路における最大の分岐点であり目標であるとする、我が国の社会全体に深く根を張った従来型の「大学入試」や、その背景にある、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を一点刻みに問い、その結果の点数のみに依拠した選抜を行うことが公平であるとする、「公平性」の観念という桎梏(しこく)は断ち切らなければならない。大学入学者選抜は、一時点の学力検査によってその後の人生を決定させるためのものではない。先を見通すことの難しい時代において、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら、自らの人生を切り拓き、より良い社会づくりに貢献していくことのできる人間を育てることが高等学校教育及び大学教育の使命であり、これからの大学入学者選抜は、若者の学びを支援する観点に立って、それぞれが夢や目標を持ち、その実現に必要な能力を身に付けることができるよう、高等学校教育と大学教育とを円滑に結び付けていく観点から実施される必要がある。

そのためには、既存の「大学入試」と「公平性」に関する意識を改革し、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等の多様な背景を持つ一人ひとりが高等学校までに積み上げてきた多様な力を、多様な方法で「公正」に評価し選抜するという意識に立たなければならない。

何よりも重要なことは、個別選抜を、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問う評価に偏ったものとしたり、入学者の数の確保のための手段に陥らせたりすることなく、「人が人を選ぶ」個別選抜を確立していくことである。「人が人を選ぶ」個別選抜の確立とは、高等学校教育で身に付けた「生きる力」「確かな学力」をいかに大学教育で発展・向上させ、社会へと送り出していくかという観点から、大学の入り口段階で求められる力を多面的・総合的に評価するという、個別選抜本来の役割が果たせるものにするのである。

また、そうした評価に転換するためには、大学入学者選抜を含むあらゆる評価において、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問い、その結果の点数だけを評価対象とすることが公平であると捉える、既存の「公平性」についての社会的意識を変革し、それぞれの学びを支援する観点から、多様な背景を持つ一人ひとりが積み上げてきた多様な力を、多様な方法で「公正」に評価するという理念に基づく新たな評価を確立していくことが不可欠である。

「主体性・多様性・協働性」を育成する観点からは、大学教育を、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換し、特に、少人数のチームワーク、集団討論、反転授業、実のある留学や単なる職場体験に終わらないインターンシップ等の学外の学修プログラムなどの教育方法を実践する。

大学において育成すべき力を学生が確実に身に付けるためには、大学教育において「教員が何を教えるか」よりも「学生が何を身に付けたか」を重視し、学生の学修成果の把握・評価を推進することが必要である。

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた

高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

～ すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために ～」（答申）

平成26年12月22日中央教育審議会

（以下、抜粋です。強い決意がうかがえる文章です。）

生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに 育むことはできない。

この厳しい時代を乗り越え、子供や孫の世代に至る国民と我が国が、希望に満ちた未来を歩めるようにするため、国は、新たな時代を見据えた教育改革を「待ったなし」で 進めなければならない。

高等学校については、現行学習指導要領において、知識・技能の習得に加えて、思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成を目指しており、その実現を目指した関係者による努力が重ねられている。大学教育についても、中央教育審議会答申等において、初等中等教育段階における「生きる力」の育成を踏まえ、「学士力」をはじめとする育成すべき力の在り方や、その育成のための大学教育の質的転換について提言されてきており、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(以下「アクティブ・ラーニング」という。)の充実などに向けた教育改善が図られつつある。

しかしながら、我が国が成熟社会を迎え、知識量のみを問う「従来型の学力」や、主体的な思考力を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる中、現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない。

特に、18歳頃における一度限りの一斉受験という特殊な行事が、長い人生航路における最大の分岐点であり目標であるとする、我が国の社会全体に深く根を張った従来型の「大学入試」や、その背景にある、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を一点刻みに問い、その結果の点数のみに依拠した選抜を行うことが公平であるとする、「公平性」の観念という桎梏(しっこく)は断ち切らなければならない。